

【ハーレーダビッドソン物語】 HARLEY-DAVIDSON

Photo/Courtesy of Harley-Davidson

グレートブランド物語

Great Brand Story

第7回：文と構成／河村喜代子

1903年という年は、アメリカでふたつのグループが木造小屋にこもり、乗り物づくりに熱中していた。ひとつは大西洋岸のキティホークの砂丘で、風が吹かれていた。彼らは動力機械で初飛行を目指していたライト兄弟である。もうひとつのグループはミシガン湖西岸沿いの町ミルウォーキーのある家の裏庭にあった3x5mの本場に狭小屋のなかで、両グループにはもうひとつ共通点があった。オハイオのデイトン出身のライト兄弟が自転車屋を営んでいたことはよく知られている。

イク、オートバイ、単車といろいろな呼び名がつく乗り物は、その後社会と深く関わるなかで独特の文化を生む。それをしたのがハーレーダビッドソンだった。この文化は、かつて数百家あったアメリカのバイクメーカーは、現在はたった一社、ハーレーダビッドソンしかない。

1903年アメリカで生まれたハーレーダビッドソンは同じ年生まれの飛行機と同様に、20世紀を動かす乗り物になった。人に近かった分だけハーレーは愛憎レベルでの文化を持つ。ニューヨーク証券取引所でHOGの3文字で示されるハーレー。その瞬間、人はまばゆく輝く大型バイクを思い浮かべる。



ハーレーダビッドソンを興した4人の創始者たち。左からウィリアム A. ダビッドソン、ウォルター・ダビッドソン、シニア、アーサー・ダビッドソン、ウィリアム・ハーレー。

後者の方はウィリアム・ハーレーにアーサー、ウォルター、ウィリアムの3兄弟で、彼らは自転車にエンジンを積んだ機械、モーターサイクルづくりに取り組んでいた。自転車つながりから20世紀を動かすふたつの乗り物が生まれたことになる。

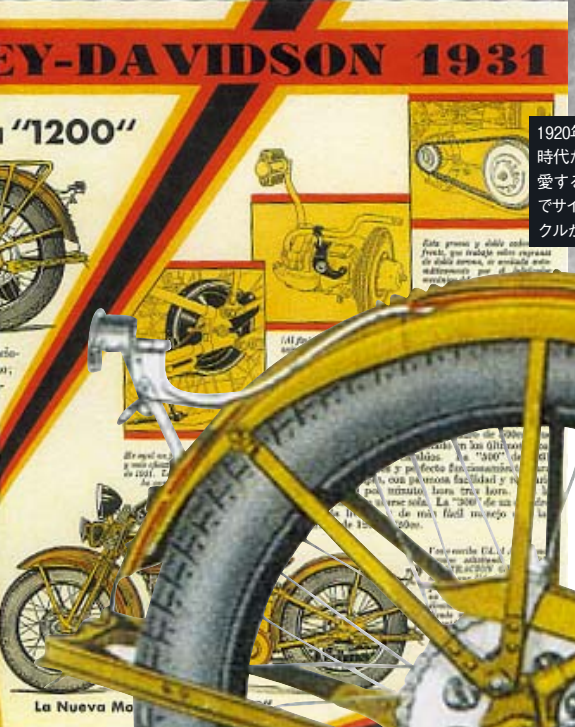


上は1903年のエンジン。排気量409cc。出力3馬力程度。中は1914年創設のレーシング部がFAM全米選手権で優勝。下は商用車として働くモーターサイクルトラック。

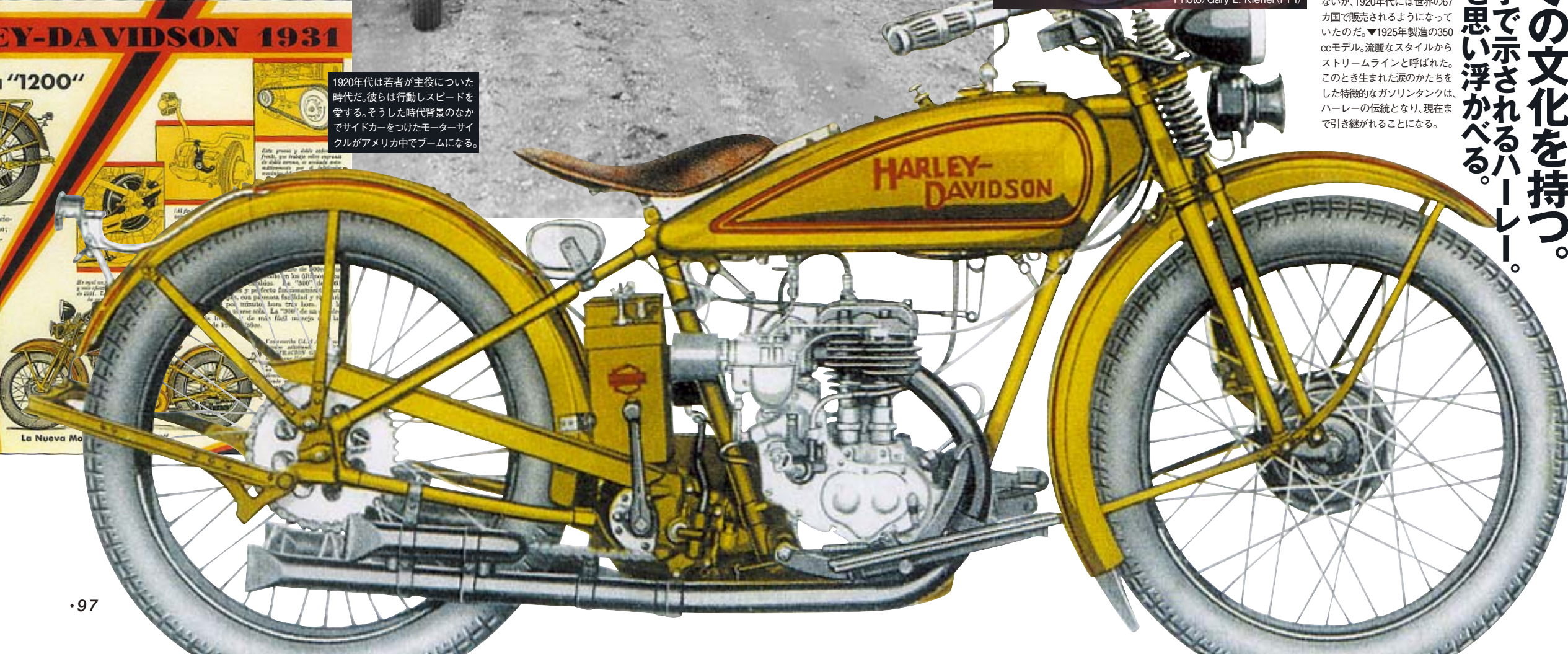
ハーレーとダビッドソンが自転車にエンジンを取り付けるアイデアを実現させた苦勞が伝わる1号機。動力を伝える役目しているのは革のベルトだ。ミシガン湖のほとりでのささやかなスタートからはとても想像できないが、1920年代には世界の67カ国で販売されるようになっていたのだ。▼1925年製造の350ccモデル。流麗なスタイルからストリームラインと呼ばれた。このとき生まれた涙のかたちをした特徴的なガソリンタンクは、ハーレーの伝統となり、現在まで引き継がれることになる。



Photo/Gary L. Kieffer (PPI)



1920年代は若者が主役だった時代だ。彼らは行動スピードを愛する。そうした時代背景のなかでサイドカーをつけたモーターサイクルがアメリカ中でブームになる。



1997年のチャリティに集まった女性オーナー。20世紀と同時に生まれたバイクは、20世紀の文化とともに大人になった。世代を重ねるなかでバイク文化は成熟し年齢層を広げて、遠の昔に男女の区別も超えた。
Photo/Sawako Ilzuka



第1号車を完成させたハーレーダビッドソンは性能アップと量産化を目指す。最初は3台だった。シカゴには最初のディーラーができた。ジュノー通りに工場を持った。そこではじめて量産と呼べるだけの台数、約50台が製造された。モーターサイクルから自転車の尻尾が消えるころ、警察や軍がハーレーダビッドソン



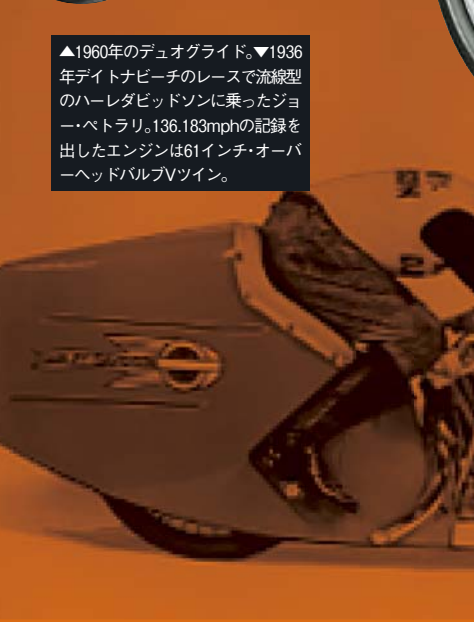
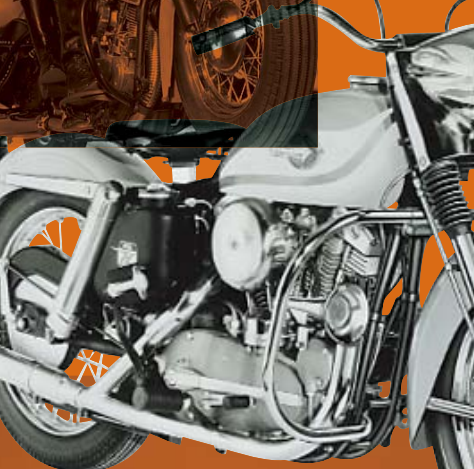
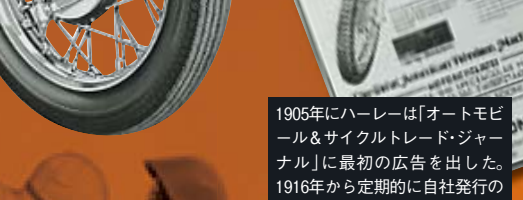
を呼んだ。第1次大戦では連絡や偵察用として欠かすことのできない足として働いた。サイドカーを付けて仕事をしていた。すでに経験済みだった。録を目指した葉巻型のハーレーダビッドソン・スプリントは1965年当時2500ccバイクの世界スピード記録177.22年、バンヘッド(1948-65年)、シヨベルヘッド(1966-84年)へと心臓部を鍛えていくことになる。

スピードはモーターサイクルの性能そのものだった。機械の力を表現する源泉であり道具の魅力と体になっていた。

当初レース用バイクをつくるつもりはなかったハーレーだが、レースには出た。そして勝った。1920年代は優勝から上位独占勝利を果たした。このページ右で男性がバーにもたれている45インチのサイドバルブモデル750ccは1929年になってきている。ヒルクライムだって基本はスピードだ。純粋にスピード記



5mphを出している。機械が仕事をするには力がある。機械の性能を押し上げることを目指すなら、スピードが鍵になる。Fヘッドエンジンは1903-29年のシングルとVツインから、フラットヘッド(1929-73年)、ナックルヘッド(1936-47



1949年、路面が多少でこぼこでも油圧フォークが即座に対応してショックを吸収し滑るように走れることからハイドラグライドと呼ばれた。

1960年のデュオグライド。1936年デイトナビーチのレースで流線型のハーレーダビッドソンに乗ったジョー・ベトラリ。136.183mphの記録を出したエンジンは61インチ・オーバヘッドバルブVツイン。

1905年にハーレーは「オートモビル&サイクルトレードジャーナル」に最初の広告を出した。1916年から定期的に自社発行の「エンスージアスト」を出していた。



Photo/Toshiaki Honda



ダイナ・スーパーグライド。価格169万円



下はファクトリーカスタム・ウルトラクラシック・エレクトラグライド。価格383万5000円

したハーレーダビッドソンは1984年にハーレー・オーナズグループ、HOG（ホグ）を設立する。ハーレー愛好者のクラブである。同年に新型エンジンのV2エボリューションを完成させ、FXSTソフテイルを発表する。そこから21世紀の現在に向けて、モーターサイクル文化の新チャプターをスタートさせた。

左はスポーツスターXR 1200。2008年8月の新登場モデル。価格147万5000円。下はウルトラクラシック・エレクトラグライド・サイドカー。2008年12月の新登場モデル。価格441万7000円～444万7000円



のめり込むほどモノづくりが好きな者たちが、ハーレーダビッドソンの原点にいた。失敗するのは簡単で、楽な道かもしれない。成功に持つてい



アメリカ生まれで、ただひとつ存続しているモーターサイクルブランド。ハーレーダビッドソンにはマシンづくりを愛する人たちがいる。

くには運を超える努力が必要だ。ハーレー自身はウィスコンシン大学に入って学び直してもいる。会社が軌道にのり、初代から息子、孫の代へと引き継がれていく。そこに彼らの手では制御しきれない領域が生まれてくる。モーターサイクルをめぐるとの関係を。反社会的でアウトローのイメージと結びつきっかけは1947年にホリス

ターで起きた暴動だった。スピードの上に直接まがかるのが、モーターサイクルだ。スピードは力であり、それを発生させる道具を所有することは喜びになる。道具の力を自分の力と錯覚するほどに、最高に魅力的で天にも昇る心地。それをホグと表現する。ホグとはビッグの意味だが、英語でホグとはハーレーダビッドソンのことだっ

た。1920年ころは悪口ではなかったホグの呼び名にいつの間にか別の色が付いていた。ハーレーダビッドソンは1960年代に変動の時代に入る。これまでのロゴの前にAMFの3文字が加わった。1969年にAMF（アメリカンマシン&ファンダリー）と合併した。1981年に再度株を買い戻して、ライダーシップを取り戻



1979

手前は1200ccスーパーグライド。1979年当時、時速20マイルから5秒フラットで50マイルまで駆け上がるパワーが自慢だった。それも後ろに人を乗せていてもである。奥はファットボブ・スーパーグライド。1200ccより140ccばかり多かったせいで「ふとっちょ」と呼ばれた1340cc Vツインエンジン。どちらのモデルもバックホーンバーを採用しグリップがライダーに近くなり、快適性が追求されていた。



1980



1992

▲AMF時代のハーレーダビッドソン1000cc。▼1992年のソフテイル。▲ハーレーダビッドソンは、ダビッドソン家の裏庭の木造小屋からはじまった。毎年のように工場を拡張した。木造平屋から1916年にはレンガ造りの3階建てへ。その当時から工場脇にはハーレーダビッドソンとペイントしたタンクがあった。現在は、旧本社ビルの屋上にのっている。

